

マリンバ アドバイザー



高島 聡美

益子町生まれ。

幼少よりピアノ、12歳より打楽器・マリンバを始める。

宇都宮短期大学附属高等学校音楽科及び宇都宮短期大学音楽科打楽器専攻卒業後、イタリア国立ヴィチエンツァ音楽院、日本女子大学家政学部児童学科 (Institute of Creativity in Music Education 研究会)、リトミック研究センターにて学ぶ。

栃木県吹奏楽ソロコンテストにてマリンバ金賞及びグランプリ賞受賞。グラン・マエストロ NAKAGAWA 記念イタリア 5 都市で開催された重要文化財特別演奏会に日本のマリンバ奏者として出演。世界最古の屋内劇場世界文化遺産テアトロオリンピコ劇場で開催された国際フェスティバルにてマリンバソロを演奏。日本クラシック音楽協会優秀指導者賞受賞。

現在、宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。益子町にて高島音楽研究所主宰。

「舞台でのマリンバ演奏と表現術」

はじめに

木琴(マリンバ)の音色は自然由来の音です。人類は「木」の音から紡ぎ出される癒しの音色に魅了され、心の内側を音楽で表現してきました。

日本でのマリンバは、クラシック作品を中心に2本マレットでメロディを奏でる楽器として愛され今日に至ります。繊細なピアニッシモ、持続音やビブラートを彩るトレモロ奏法は、芸術的なマリンバ奏法の極みともいえるでしょう。一方世界を見渡すと、マリンバは現代音楽を奏でるコンテンプラリーな楽器として親しまれ、4本マレットを駆使した超絶技巧、複数の奏者で楽器をぐるりと囲む演奏形態や弾き歌いと、パフォーマンス性に富んだ楽器として発展しています。

本日は可能性に満ちたマリンバの舞台での演奏と表現術を様々な観点から考察していきましょう。

1. 耳の力で弾こう

大ホールの舞台でマリンバを演奏するときは、空間に発せられた音を1つの音として聴きながら奏でましょう。

ピアノとのアンサンブルやマリンバデュオなど、複数の奏者が同時に演奏するときも全体の音が聴きとりやすいよう楽器の配置や構える位置に気をつけることで、トレモロの粒や和音の打点が揃った美しい響きのアンサンブルを奏でることができますよ。



2. マレットの重さで弾こう

マリンバの豊かな音色はマレットの重さで鳴らします。このとき、マレットを背中から落としていくことを意識して重力で奏でましょう。

近年のマリンバオリジナル曲、特に持続音のないコンテンポラリー作品では、音の大小・長短にあわせたマレットの運び方や表現を工夫して、無味乾燥な演奏にならないようにすることも大切です。

どのようなジャンルの曲も大ホールの舞台では音を遠くまで響かせるため、深い呼吸とともにマレットの重さに身を任せ、全身で奏でることを心がけてくださいね。



3. 重心のかけ方で音色を変えよう

西洋の舞踊(バレエ)には繊細な軽やかさを、日本の舞踊からはずっしりとした重さを感じたことはありませんか？これは、重心のかけ方(高低差)がその違いを生み出しています。

マリンバの演奏でたとえると、大ホールの舞台で軽やかな音色を出したいときは重心を高く、深い音色を出したいときは重心を低くして演奏するとよいでしょう。楽器間の移動は体の柔軟性をつかい、音色はマレットの材質のみでなく重心のかけ方で変化をつけることにより、体の流れとマレットの流れ、さらには音楽の流れが一致して、自然な演奏表現を醸し出すことができますよ。



おわりに

大ホールの舞台上で楽器と体で美しくマリンバを奏でるためには、日頃から正しい姿勢での基礎レッスンを積み重ねていくことが大切です。

全身でクラシックからコンテンポラリー音楽を奏でる者として、古典音楽の名匠たちの作品や、「芸術の母」ともよばれる身体表現、舞踊の世界からも演奏と表現術を研究してみてくださいね。

素直な心と身体から生み出される演奏は、自然と音楽的な演奏となり、個性は木の音色にのって、空間全体に響き渡ることでしょう。

